性差とイントネーションのパラメトリックス

永原　浩行

文末の抑揚だけがイントネーションではない。イントネーションは、音の高さ、強さ、長さ、速さ、リズムなどのパラメターの設定（パラメトリックス）によって決まる総合的なものだ。こうしたイントネーションのパラメトリックスを下敷きに、マコーネル=ジネーは、英語での性差とイントネーションの関係を追及する。しかし、英語のような〈強さアクセント言語〉に基づいたイントネーションと性差のパラメトリックスは、〈高さアクセント言語〉である日本語のパラメトリックスとは、当然ながら異なる。そのパラメトリックスの違いを理解せず、ただ日本語の文末の抑揚を調べてみても、その結果がどのように他の言語とつながるのか分からない。この研究では、マコーネル=ジネーの英語での研究を、高さアクセント言語の日本語にまで拡げるために、普遍的なイントネーションと性差のパラメトリックスの理論付けを試みる。

1．アクセント、メロディー、イントネーション

世界の言語には、英語や日本語のような〈アクセント言語（accent language)〉と中国語のような〈音調言語（tone language)〉があるが、アクセント言語はさらに、英語のような〈強さアクセント言語（stress-accent language)〉と、日本語のような〈高さアクセント言語（pitch-accent language)〉に分けられる。この研究では、英語や日本語のようなアクセント言語に限って話を進める。アクセント言語のイントネーション研究で一番大切なことは、〈アクセント〉、〈メロディー〉、〈イントネーション〉という三つの概念を理解・区別することだ。特に、〈メロディー〉と〈イントネーション〉の区別は重要だ。まず、〈アクセント〉から説明を始める。

1．1　アクセント

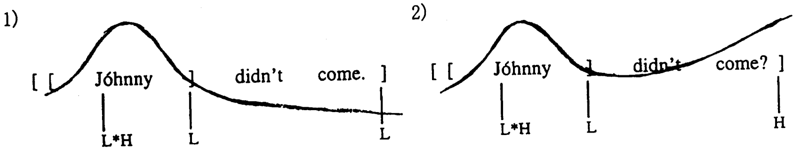
強さアクセント言語では､強勢（stress）の違いが意味の違いにつながる。

例えば、permít は〈許す〉という意味の動詞だが、pérmit は〈許可証〉という意味の名詞である。日本語では、「箸（háshi）、橋（hashí）、端（hashi）」の違いのように、アクセントにより調子の高低が決まり、意味も違ってくる。英語では、言葉のプロミネンス（つまり、一つの言葉で音が一番強く高く発音される音節）が音の強弱で主に決まり、日本語では音の高低で決まるという違いがあるが、一つの言葉に一つのプロミネンスがあるという点では英語も日本語も同じアクセント言語なのだ（Beckman）。

1．2　メロディー

メロディーは、発話する時の音調の上がり下がりのことで、歌のメロディーに喩えることができる。例えば、次の図－1は、英語の否定文と否定疑問文のメロディーを示している。

図-1: 英語のメロディー (Hは高、L は低)

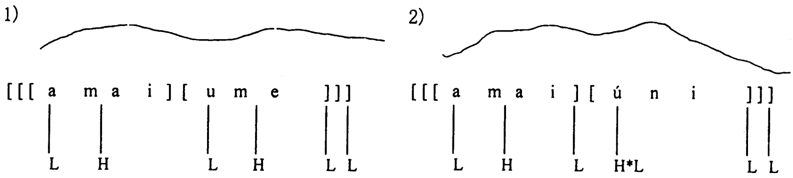


英語では、個々の単語のアクセント以外に、文全体としてのアクセントについても考慮しなければならない。例えば図－1では、どちらの文もJóhnnyという言葉に文アクセントがある。この文アクセントに付く L*H はアクセント音調素（pitch-accent）と呼ばれている。星印(*)のないHやLは、境界音調素（boundary tone）と呼ばれ、句や文末に付く(Pierrehumbert)。歌のメロディーが音符のつながりとするなら、イントネーションのメロディーは、音調素のHやLがつながったものと言える。例えば図－1のメロディーは、(1) L*H-L-Lと(2) L*H-L-Hで表すことができる。実際の音の上がり下がりは、メロディーの点に当たるHやLを滑らかな曲線で結んだものである。

日本語のメロディーも同様に記述できる。次の図－2に示したのは、「甘い梅」と「甘いうに」という二つの発話のイントネーション曲線をHとLのメロ

ディーで表したものだ。

図-2: 日本語のメロディー



図－２(1)では、L-H-L-H-L-Lが、(2)ではL-H-L-H*L-L-Lがこれら二つの発話のメロディーだ。図－２のメロディーの最後の二つのLは、アクセント句末と文末につく境界音調素である。(2)のメロディーでは「うに」の「う」にアクセント音調素のH*Lが付く。日本語のアクセント音調素はいつもH*Lであり、調子がHからLに急激に下がることを示している。この二つの発話のイントネーション曲線は、それぞれのメロディーの音調素を点として曲線で滑らかにつなげたものとなる (Pierrehumbert/Beckman)。

ここで一番重要なことは、メロディーはイントネーションの背骨に成る部分には違いないが、メロディーだけでイントネーションが成り立つのではないということだ。これは、歌に喩えてみれば分かりやすい。音符のつながりがメロディーだが、それだけで歌が成り立つのではない。音の強さ、長さ、速さ、リズム、節の切り方、小節の回し方などが総合的に影響しあって、歌が歌として成り立つ。イントネーションも同様に、メロディーだけでは成り立たない。音の強さ、長さ、速さ、リズム、抑揚の切り方などが総合的に関連しあって初めて、イントネーションがイントネーションとして成り立つ。そこで次の節では、こうしたいろいろなイントネーションの要素（つまり、イントネーションのパラメター）を大きく分けて説明する。

２．イントネーションのパラメトリックス

２．１　メロディーの種類とその現れ方

英語のメロディーは、平叙、疑問、否定、驚きのメロディーなど、種類が

たくさんある（Pierrehumbert，McConnell-Ginet）。なぜたくさんあるかというと、英語では音の上がり下がりに意味を変えてしまう働きがないので、メロディーとして自由に作り出すができるからだ。それに対し日本語では、基本的な音の上がり下がりは、意味を変えてしまうので勝手に変えられない。例えば、「雨」という言葉のHLという音調をLHには変えられない。つまり英語では、音の上がり下がりがいろいろなイントネーションのメロディーに成れるのに対して、日本語では、音の上がり下がり（例えば、「雨」のHL）は自由に変えられないものなのだ。別の言葉を使えば、日本語のメロディーは（心臓の不随意筋を支配する自律神経のように）自律的な性格が強い。自律的でないのは（つまりイントネーションで操作できるのは）、句末や文末の境界音調素だけだ。これが「イントネーション＝文末の抑揚」という印象につながる理由だ。

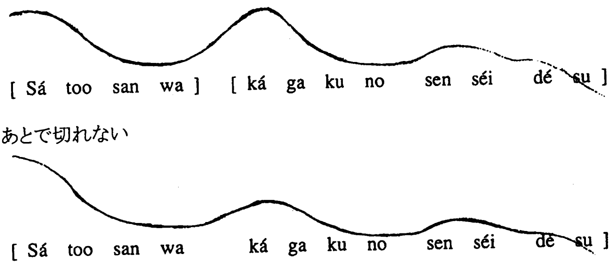
また、メロディーがどのように表現されるかも重要なイントネーションのパラメターに成る。一般的に、メロディーのHは、音調が高いだけではなく、強く長く発音される。逆に音が強く長くなると音調も高くなる。例えば、英語では、強勢のある音節は強く長く発音されるが、日本語では、アクセントのある音節は調子が高いだけではなく、強く長く発音される。

2．2　イントネーションの切れ目

イントネーションの調子の上がり下がりにはいくつかの山があるのが普通だ。例えば、図－３を見てみよう。

図-3: イントネーションの切れ目

1)「は」のあとで切れる



どちらの文にもイントネーションの山が三つある。最初の山は「佐藤さんは」の「さ」に、二つ目は「化学の」の「か」に、三つ目は「先生です」の「せ」にある。しかし、山の高さは一様ではなく、図－３(2)に見られるように、徐々に低くなる。この、音調が幾何級数的に低くなる現象は、〈ダウンステップ〉と呼ばれ、文より小さい単位の〈イントネーション句〉で起こる。例えば図－３(1)では、「佐藤さんは」でダウンステップが切れ（つまり、一つのイントネーション句が切れ)、「化学の先生です」で次のダウンステップ（つまり、次のイントネーション句）が始まる。図－３(2)では、文全体が一つのイントネーション句を構成しており、意味上「(田中さんじゃなくて）佐藤さんは」という対比のイントネーションになる。つまり、ダウンステップの切れ目はイントネーションの切れ目になり、イントネーションの切れ目は意味の切れ目ということである。

２．３　文を越えるイントネーション

イントネーションは、普通、文という統語的単位と関連して議論されるが、可能性としては、一つのイントネーションのパターンが一つ以上の文にまたがることも考えられる。例えば、一人の発話者が途中止めしたあとを受けて相手が話を補うような〈共同発話〉の場合に、二人の発話者のやりとりで一つのイントネーションのパターンが完結する可能性も考えられる。ここで一番重要なのは、イントネーションの切れ目が、名詞句・動詞句・文といった、統語論での切れ目と重なる必要がないということだ。特に、イントネーションの一区切りが統語論で定義された文の域を越えてしまう可能性もありうるということは、イントネーションが、文の領域を越えて初めて成立するディスコースと深く関わっていることを考えれば、当然かもしれない。

３．性差のパラメトリックス

マコーネル＝ジネーは、英語のイントネーションのパラメトリックスを下敷きに、英語での性差とイントネーションの関係を、〈選択（selection)〉と〈偏差（variation)〉という二つのパラメターで理論付けようとする。例えば、

どのようなメロディーを使うのかということに性差が現れるのは〈選択〉であり、同じ上がり調子のメロディーでも、どの程度上がるのかに性差が現れるのは〈偏差〉である。

3．1　〈選択〉の性差

英語では、例えば、どのようなメロディーを使うのかに〈選択〉の性差が現れる。「晩御飯、いつ？」という夫の質問に、「六時頃」と普通の平叙イントネーションで答えるのか、「六時頃？」と疑問イントネーションで答えるのかは、メロディーの選び方の違いであり、これが性差の指標になる。また、人に何かしてもらいたい時に、命令のイントネーションを使うのか、依頼のイントネーションを使うのかというのも〈選択〉の問題だ。

それに対し日本語では、メロディーの非自律的な違い（つまり、イントネーションで操作できる違い）が句末・文末にしか現れないので、メロディーの選び方の違いは、句末・文末の音調素の選び方の違いにしか現れない。例えば、〈半疑問〉と呼ばれる、音調が下がらない句末のメロディーを使うかどうかに性差が現れるとすれば、それは〈選択〉の性差である。ただ日本語の場合に複雑なのは、どの終助詞で句や文を終えるのかという問題も絡んでくることだ。つまり、メロディーの〈選択〉だけでなく、終助詞の〈選択〉にも性差が現れることも合わせて考えなければならない。例えば、同じ下がり調子のメロディーでも、終助詞の「ね」を使うのか「よ」を使うのかに性差が現れるだろうし、逆に、同じ終助詞「ね」を使っていても、上がり調子なのか下がり調子なのかということも考慮しなければならない。

また、イントネーションの切れ目に関し、どこでダウンステップが切れるのか（つまり、どこでイントネーション句が切れるのか）ということも〈選択〉の問題だ。例えば、相づちが起こるとすればイントネーション句の切れ目が一番自然なのだが、相づちがどこで起こるのか（つまり、どこでイントネーション句が切れるのか）にも性差が現れる。

文を越えるイントネーションに関して、例えば、共同発話とイントネーションの関係で、発話のやりとりが一つのイントネーションのパターンを成す

のかどうか、そして、それがどのようなパターンなのかも〈選択〉の問題であり、性差の指標になる。

3．2 〈偏差〉の性差

〈偏差〉は、同じメロディーをどのように違って実現するのかということに関わっている。英語では、例えば、同じ上がり調子の疑問メロディーでも、調子の上がり方の程度が人により性により違う。一般的には、女性の方が高く上がると言われている。また、音の高低の幅にも性差が現れる。一般的に英語では、男性のイントネーションは女性に比べずっと単調だと言われるが、これは男性の音の高低の幅が女性より狭いということを裏付けている。高低の幅だけではなく高さのレベルでも、女性は四つのレベルを使い分けるのに対し、男性には三つのレベルしかないと言われている。声の調子の上がり方・下がり方も、女性は男性に比べ、頻繁で、急激で、長引きもし、上がり下がりの程度も大きい。

同じようなことは日本語についても言える。例えば、女性のイントネーションの音調が男性と比べて高いと言われている。これは正確には、女性の声の高低の幅が男性より高域にある、または、声の幅を相手により状況により男性よりずらすことが多いということだ。高低の幅だけではなく、高さのレベルや調子の変わり方にも性差があるはずだ。また、長さも重要なパラメターだ。例えば、女性の使う終助詞の「わ」は、男性の「わ」より一般的に長い。このように、メロディーの実現の仕方というパラメターは性差の指標として重要だ。

また、どのようなメロディーを使うのかは〈選択〉の問題だが、同じメロディーでもどのような頻度で使われるのかは〈偏差〉の問題だ。例えば、半疑問の句末メロディーは、女性も男性も使うが、それがどのような頻度で使われるのかは〈偏差〉の性差として見なければならない。同様に、イントネーション句の切り目の回数や、一つのイントネーション句の平均語数などと性差の関係も〈偏差〉の問題として見のがしてはならない。

4．結　論

メロディーの選び方、メロディーの表現の仕方、メロディーの切り方などが一つの有機体として性差の指標を成す。そうした指標をイントネーションのパラメターに沿って見ることが大切だ。というのは、パラメトリックスのやり方に沿わないかぎり、いろいろな言語での性差の現れ方の比較ができないし、日本語なら日本語の中でどの部分がイントネーションで操作できる部分なのかも分からなくなるからだ。この意味で、イントネーションの音韻論的パラメトリックスを理解することは、イントネーションの社会言語学的意味論の研究においても性差の研究においても、とても重要なことだ。

引用文献

Beckman, Mary (1986), *Stress and Non-Stress Accent,* Foris Publications, Dordrecht, The Netherlands.

McConnell-Ginet, Sally (1983), Intonation in a Man's World, in B. Thorne, C. Kramarae, and N. Henley (eds.), *Language, Gender and Society,* Newbury House Publishers, Rowley, Massachusetts.

Pierrehumbert, Janet (1980), *The Phonology and Phonetics of English Intonation,* MIT dissertation.

Pierrehumbert, Janet and Mary Beckman (1988), *Japanese Tone Structure,* MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

(ながはら　ひろゆき)